



発掘 文学の宝



町では、本年度より「熊本県夢チャレンジ事業」を活用し、苓北町に残る文学の宝を発掘しています。今回は、苓北町にゆかりのある文豪たちを紹介する連載企画第4回目として、苓北町富岡出身で歌人、作家の「高橋喜惣勝」を紹介します。

企画／ドットワークス 下川嘉奈

高橋 喜惣勝

1910年2月28日 - 1952年6月12日
長崎県天草郡富岡生まれ



富岡出来町出身

昭和19年、國枝治の名で発表した「技術史」が芥川賞候補となった地元苓北町出身の歌人、作家。病のため夭逝。

芥川賞候補作家で プロレタリア歌人

平井 建治

富岡西海岸通り。富岡西港降り口右側に、高橋喜惣勝文学碑がある。喜惣勝は、苓北町内では少し認知されてきたが、熊本県内での周知は皆無である。富岡出来町の出身だが、その人生は短歌界で活躍したもの悲惨であった。同文学碑建立は、筆者が建設地探し、除幕式や文学集会の準備に3年近く費やした。

平成18年8月26日午後2時。第一部・除幕式は夏の炎天下にテント2張、町内外から46人の政治家、文化人、事業家が参列。田嶋章二苓北町長、永野義孝天草文化協会長、堀田善久同相談役、木山惟彦天草歴史文化遺産の会長などが一堂に会し、梅本健三宮司の神事、発起人代表挨拶、祝辞、記念撮影が行われた。同記念碑は、祖父や父が眠る高橋家の墓のすぐ下にある。背後には喜惣勝が終生愛してやまなかった天草灘が広がっている。筆者にとって最も感慨深い場所の選定であった。

3時半。第二部・文学集会は富岡公民館に押し掛けた文学ファン140人が参加して始まった。祝辞は、松本益弘教育長、小田原満天草市芸術文化協会長、阪本禮之苓北町文化協会長。次に喜惣勝著「天草灘物語」朗読。モンペ姿の天草文芸会同人・斉藤幸子さんが登場。声優顔負けの情緒たっぷりの話しに、参加者も酔いしれ、当時の富岡の情景を彷彿とさせた。さらに同会同人・谷口幹人さんの講話「喜惣勝天草外の名作」。喜惣勝の「新文章読本」を取り上げ、林美美子、川端康成、谷崎潤一郎の文章と比較され、喜惣勝の文章の素晴らしさを紹介された。続けて同会代表の鶴田文史さんの講話「喜惣勝天草の名作」。喜惣勝の作品を詳しく解説された。短歌朗詠は苓北町読書活動推進ボランティア「たんぽぽホール」代表・船越啓子さん。喜惣勝の望郷の短歌18首を朗々と詠まれた。最後のプログラム。作詞・鶴田文史、作曲・小田原満「望郷の人」を、苓北町コーラスグループ「苓北すみれコール」が、しっとりとおさめた。

6時半。第三部・祝賀会は岡野屋旅館。参加者38人が夜遅くまで文化談義に盛り上がった。ところで、手前味噌になるが、県内でも文学集会、祝賀会付きの文学碑建立は珍しい。大成功の陰には、うってつけの建設地を貸与してくれた苓北町の理解が大きい。マスクミヤインターネットの報道も助かった。何と言っても多くの人の協力があったからに他ならない。それは高橋喜惣勝の未知への憧れであったに違いない。田中昭策さんがみくに新聞で発表され、鶴田文史さんが深掘して世に出され、筆者もほとんどの作品を収集した。

平成22年5月25日、東京都小平市に喜惣勝の墓を探し当て、熊本県人として初めて、鶴田文史著「天草灘物語」を供えてお参りできたのは、万感胸に迫るものがあった。

(つづく)

天草灘物語
芥川賞候補作家・高橋喜惣勝文学
鶴田文史 編著

お勧め本

『天草灘物語』
鶴田文史著 近代文芸社

筆名を國枝治、村尾淳、黒岩扇二の名で出した高橋喜惣勝の作品と人となりをもとめた唯一の本です。